

## 新米警官メイズリークの悩み

「ダステイフさん」と警察官のメイズリークさんがなにか考え込むように言いました。ダステイフさんは年はとっていましたが、難事件をみごとに解決してきたうでさきの刑事なのです。「実はご相談にうかがったのです。ある事件でどうにもわからないことがありまして、お知恵をお借りしたいと思ひまして」

「そういうことは自分だけで悩まずに、吐き出した方がいいですよ」とダステイフさんは言いました。「その事件を担当したのはだれですか？」

「それが、ほくなんです」とメイズリークはため息をつきました。「考えれば考えるほど、わけがわからなってくるのです。もう頭がおかしくなりそうです」

「つまり、だれにいったいなにをされたというのです？」とダステイフさんはなだめるようにさききました。

「いえ、だれもわたしになにもしていません」とメイズリークは、堰を切ったようにしゃべりだしました。「ですからかえってめんどうなんです。自分でやったことなのに、どうしてや

「たか自分でわからないんですから」

「まあまあ、落ちついて。どおってことのない話なんでしょ」とダスティフ老人はなぐさめるように言いました。「いったいどうしたんです？」

「金庫破りを捕まえたんです」とメイズリークは暗い顔で答えました。

「それだけのことですか？」

「それだけのことです」

「それじゃあ、その捕まえた金庫破りが、ほんとうの犯人ではなかったってわけですね」とダスティフさんが助け舟を出しました。

「いやまちがひなく犯人です。ユダヤ慈善協会の金庫を破ったと自白したんですよ。ルヴォフ生まれのロザノウスキとかロゼンバウムだと自分で言ってますし」とメイズリークはつぶやくように言いました。「スバナやレンチといった金庫破りの道具も、その男のところで見えませんでしたしね」

「つまり、なにがわからないんですか？」とダスティフさんはうながすようにききました。

「つまり」と警察官は考えこんだすえに答えました。「犯人をなせうまく捕まえることができただが、どうしてもわからないのです。あの、順序だててお話しします。ひと月前、三月三日のことでした。夜中の〇時までの勤務についていました。おほえていらっしやるかどうかわかりませんが、雨がもう三日も降り続いていたので。ちよつとカフェに寄ってから、ヴィノフ

ラデイにある自宅に帰ろうと思いました。ところがなぜか家ではなくて、反対方向のドゥラー  
ジュデナー通りのほうに向かったのです。なぜそちらのほうへ行ったのでしょうか？ ダステ  
イフさんならわかるかと思って」

「まあ、たまたま、偶然といったところでしょうね」とダステイフさんは答えました。

「でも、あんなひどい天気のとくに、偶然に街をぶらついたりするわけがないはずです。自  
分がいったいなにをしようとして家とは反対の方向に向かったのか、知りたいんです。なにか  
虫の知らせというか、それともテレパシーでも働いたんですかね」

「そうだね」とダステイフさんはうなずきました。「それもありうることもかもしれない」

「なるほどわかりました」とメイズリークは言いながらも、まだ合点がいかずに話を続けま  
した。「だとすると、ほとくの意識下に『三人の乙女』をちよつとのぞいてみよう、という気持  
ちがあったんですかね」

「ドゥラージュデナー通りのあの安宿かね」とダステイフさんは思い出すように言いました。

「ええ。あそこは、ブダベストやハリチからブラハへかせぎにやってくる金庫破りやスリが  
泊まる宿なんです。ですからあそこには目をつけているんですがね。ちよつと足を伸ばしての  
ぞいてみる気になったのは、警察官のくせみいたいなもんですかね？」

「そうかもしれない」とダステイフさんは、まじめな口調で答えたのです。「人間はそういう  
ことを、ときどきごく機械的にやるからね。義務感からやるときは特にそうなんだが、それは

別におかしなことではないよ」

「いずれにしても、ドゥラージュアナー通りまで行きました」とメイズリークは話を続け、「その『三人の乙女』で宿帳に一応目を通すと、そのまま通りをさらに先まで歩いていったんです。ドゥラージュアナー通りのはずれまで行ってから、もとの道を引き返しました。でも、いったいなぜ引き返したんですかね？」

「ついたくせのせいだよ」とダステイフさんは答えたのです。「パトロールがくせになってい  
るんだね」

「そうかもしれません」とメイズリークはうなずきました。「勤務をし終わって家に帰るつもりだったのに。虫の知らせというか、予感があったのかもしれないね」

「それもありえるね」とダステイフさんはメイズリークの考えにあえて反対しませんでした。「そういう予感がしても、別に不思議なことではない。人にはそういうすごい能力があるんだ……」

「いや、でも」とメイズリークは思わず大きな声を出してしまいました。「つまり、ダステイフさんはあんな行動をしたのはほくのくせのせいか、それともほくになにかすごい能力があったためだ、と言うのですね。そこが知りたいんですよ！——いいですか、そうやってほくが歩いていると、向こうから男が一人やって来たんです。でも、夜中の一時にドゥラージュアナー通りをだれが何のために歩こうと、別に悪いことではないですよ。そのこと自体には少しも

あやしいことはありません。ほくもあやしいなんてまったく思いませんでした。でもちようどそのときに、街灯の下で立ちどまり、たばこに火をつけたんです。夜に、しっかりと人を見たかと思つたときには、警官ならだれでもそうします。でもこれは、偶然だったのか、それともくせだったのか……それとも無意識に警戒心がわいたのでしょうか？ どう思いますか？」

「わかりませんね」とダステイフさんは答えました。

「くそっ！ ほくにもわからないですよ」とメイズリークは腹立たしげに大きな声を出しました。「ほくは街灯の下で、たばこに火をつけ、その男は、ほくのそばを通りすぎたんです。ほくは地面を見ているだけで、男の方を見もしませんでした。でも、その男がそばを通りすぎるときに、なんとなくなにか気になりはじめ、このくそ野郎！ とつぶやいたのです。なにか変だぞーだがいったいなんなんだ？ だって、ほくはその大将のことをろくに見てませんでしからね。雨の降る街灯の下に立ってじつと考えこんでいると、とつぜん、ほくの頭の中を『靴』がよぎったのです！ その男の靴にはなにか妙なものがついていた、そうだ、おもわず『灰だ』と声を出してしまいましたよ」

「灰って、どんな？」とダステイフさんがききました。

「つまり灰ですよ。その瞬間に、いま通り過ぎたその男の靴のソールと甲革のあいだに灰がついていたのを思い出したんです」

「靴に灰がついていてなにが悪いんですか？」とダステイフさんがもう一度きき返したので

す。

「そりやそりですけど」とメイズリークは声はずませて言いました。「でも、ダスティフさん、その瞬間、ぼくの目には見えたんです。そう、破られた金庫から灰が床にこぼれ落ちるところがまざまざと見えたんですよ。靴が灰をふんでいるところも見えたんです。スチールのプレートとプレートのあいだにつめてある、あの耐火材です。耐火材が灰に見えたんですな」

「つまり、直観というやつだな」ダスティフさんはきっぱりと言ったのです。「天才的と言いたいところだが、ま、たまたま当たった直観というところかな」

「いやいや」とメイズリークは言いました。「雨が降っていませんでしたら、ぼくはその灰なんか全然気にもとめなかつたでしょう。でも、雨が降っているのに、靴に灰がついている人なんてふつうはいませんか」

「そういうことなら、むずかしい言い方だが経験的演繹（えんぎやく）ということになるね」とダスティフさんは納得顔で言ったのです。「つまり、簡単に言うと、経験の積み重ねによって生まれた、すぐれた判断ということだね。ところで、それで結局、どうになりました？」

「その男のあとをつけました。やつは、やはり『三人の乙女』に入っていたんです。電話で私服を二人呼んで、強制捜査をやりました。そして、ロゼンバウムの部屋で例の灰のついた靴、レンチなどの金庫破りの道具一式、ユダヤ慈善協会から盗んだ一万二千コルナを見つけた。このことに目新しいことはなにもありません。新聞はご承知のとおり、警察はすぐれた

捜査能力で事件を迅速に解決した、と書いてくれましたが——とんでもないナンセンスですよ！  
——たまたまドゥラージュデナー通りに行つて、たまたまあいつの靴を見たから、うまくいっただけのことで……つまり偶然が重なっただけなのですよね」とメイズリークは元気なさそうに言いました。

「それでまだなにが気になるんですかね？」とダステイフさんが言いました。「犯人を捕まえただけから、大成功じゃないんですかね。自分をほめるべきですよ」

「自分をほめるですって——」とメイズリークは、つい抑えられない自分の気持をダステイフさんにぶつけて、大声で言ったのです。「なにをほめればいいのかわからないのに、いったいどうやってほめるんですかね？ 刑事として信じられないほど抜け目がない自分をですか？ それとも、警察官として身につけている機械的ともいえるくせをですか？ それとも、ありがたい偶然をほめるのですか？ それとも、なにかの直感か、テレパシーをですか？ いいですか、これはほくがはじめて手柄をたてた事件なんですよ。また手柄をたてるためにはなにかしなければいけませんよね？ でもダステイフさん、たとえば明日、殺人事件でも起きて、ほくがその担当になったら、ほくはどうすればいいんでしょうか？ 街じゅうを走りまわって、靴という靴をしっかりと見なくてはいけないのでしょうか？

それとも、虫の知らせというか、自分の中で聞こえてくる声が殺人犯の居場所をはっきり教えてくれるまで、あてもなく街を歩きまわるべきなのでしょうか？ 今度の事件のおかげで、

ぼくはこんな立場に追い込まれてしまったのです。警察では、いまみなが、あのメイズリークはなかなか鼻がきく、あのメガネをかけた若い人には、なにか刑事に向いた才能があるよな、などと言いついてるんです。わたしにしてみりゃ、これはなんとも絶望的な状態ですよ」メイズリークはこんな風につぶやいて、「そりゃなんらかの方法は必要です。今度の事件を手がけるまで、ぼくはいろいろな科学的な捜査法を信じていました。つまり観察や経験、それに組織的な捜査などといったばかげたものですよ。この事件を経験してわかったんです」メイズリークはかえってほっとしたように言い出したのです。「いいですか、あれはただ偶然にめぐまれただけだったんですよ。ぼくはただ、ついでにただけなんです」

「そんなふうに見えるかもね」とダスティフさんはまじめくさって答えました。

「しかし、一見偶然に見えても、しっかりした観察とか理詰めの考え方がなければ偶然もおきませんからね」

「それに、決まりきった機械的な仕事もね」と若い警察官は少し落胆したように付け加えました。

「それに直観と、多少の予感にもめぐまれなくてはね。本能もだね」

「なんてことだ。ダスティフさん、それじゃぼくは」とメイズリークは思わずうめいたので、「いったいこれからどうすればいいんですか？」

「メイズリークさん、お電話です」とウエイターが呼びました。「本庁からです」

「そうら、来たぞ」とメイズリークは、緊張してつぶやきました。電話からもどってきたメイズリークは青ざめた顔をして、もう気が立っていたのです。「お勘定を」とウエイターを呼ぶ声までうわずっていました。「さあ、始まりましたよ。ホテルでどこかの外国人が殺されているのが見つかったんです。くそー」そう言うと、メイズリークはダステイフさんをおいたまま出ていったのです。この精力的な青年は、もう胸をワクワクさせているようでした。